

令和7年10月28日
青森市企画部企画調整課長

青森公立大学 国際芸術センター青森（ACAC）

アーティスト・イン・レジデンス事業の開催について（情報提供）

このことについて、青森公立大学国際芸術センター青森より別添資料のとおり情報提供がありましたので、お知らせします。

なお、詳細につきましては、別添資料のお問合せ先（青森公立大学国際芸術センター青森 電話：017-764-5200）にご連絡いただくようお願いします。



2025 年 10 月 28 日

青森市政記者会 御中

青森公立大学 国際芸術センター青森 [ACAC]

館長 服部 浩之

(公印省略)

青森公立大学 国際芸術センター青森 [ACAC]

アーティスト・イン・レジデンス事業の開催について（ご案内）

平素より青森公立大学国際芸術センター青森（ACAC）の運営につきまして、ご理解とご協力を賜り厚くお礼申し上げます。

この度 ACAC で実施する下記の事業について、ご案内致します。事業に関して開催告知広報物をお送りしますので、取材・報道にご協力いただきますよう宜しくお願い申し上げます。

記

青森公立大学 国際芸術センター青森 [ACAC]

アーティスト・イン・レジデンス・プログラム 2025 「CAMP」

プログラム期間：2025 年 9 月 15 日（月）－12 月 15 日（月）

展覧会会期：2025 年 11 月 14 日（金）－11 月 29 日（土）

展覧会会場：協同組合タッケン美術展示館（青森市柳川 1-1-5 JR 青森駅東口ビル 4F）

参加アーティスト：前谷開（日本）、丹治りえ（日本）、アディ・スンドロ（インドネシア）、アティッタヤポーン・センポー（タイ）、サマンサ・クラーク（スコットランド）

概要：公募により選出された国内外のアーティスト 4 名と、スコットランド北海岸に位置するオークニー諸島、メインランド島の中心地のひとつであるストロムネスに拠点を持つアートギャラリー／美術館である Pier Arts Centre の推薦による 1 名を合わせた計 5 名を招へいし、アーティスト・イン・レジデンス（AIR）プログラムを開催いたします。本年度は ACAC の施設改修工事に伴い、青森駅に直結する JR 青森駅東口ビル内の協同組合タッケン美術展示館を成果発表の場とします。青森での滞在制作を通し、展覧会、パフォーマンス、ワークショップなど多岐にわたる活動を展開します。

【連絡先】

青森公立大学国際芸術センター青森

〒030-0134

青森市大字合子沢字山崎 152 番地 6

TEL：017-764-5200 FAX：017-764-5201

青森公立大学 国際芸術センター青森 [ACAC] アーティスト・イン・レジデンスプログラム 2025 「CAMP」(キャンプ)

Aomori Contemporary Art Centre, Aomori Public University

Artist in Residence Program 2025 "CAMP"

プログラム期間:2025 年 9 月 15 日(月)–12 月 15 日(月)

展覧会会期:2025 年 11 月 14 日(金)–11 月 29 日(土)

展覧会会場:協同組合タッケン美術展示館(青森市柳川 1-1-5 JR 青森駅東口ビル 4F)

青森公立大学 国際芸術センター青森 [ACAC] アーティスト・イン・レジデンス プログラム 2025 「CAMP」	Aomori Contemporary Art Centre, Aomori Public University Artist in Residence Program 2025	展覧会場 Venue 協同組合タッケン美術展示館 Aomori Citizens' Art Gallery
		展覧会会期 Exhibition period 2025. 11. 14 (fri)–11. 29 (sat)
		プログラム期間 Program period 2025. 9. 15 (mon)–12. 15 (mon)
参加アーティスト Artists 前谷 開 MAETANI Kai 丹治 りえ TANJI Rie アディ・スンドロ Adi SUNDORO アティッタヤポーン・センポー Atittayaporn SAENPO サマンサ・クラーク Samantha CLARK		 Aomori Contemporary Art Centre 国際芸術センター青森

デザイン:本庄浩剛

■ 初の市街地会場で開催—青森での滞在から生まれた作品を発表します！

国際芸術センター青森(ACAC)は 2001 年 12 月の開館以来、アーティスト・イン・レジデンス(AIR)のプログラムを柱に、様々なジャンルのアーティストによる創造と発表の場として活動を続けています。今年の公募型アーティスト・イン・レジデンスプログラムではゲスト審査員にインディペンデント・キュレーターの池田佳穂氏を迎えました。本年度は 800 件を超える応募の中から採択された 4 名の参加者に加え、スコットランド北海岸に位置するオークニー諸島、メインランド島の中心地のひとつであるストロムネスに拠点を持つアートギャラリー／美術館である Pier Arts Centre の推薦による 1 名を合わせた計 5 名が ACAC で滞在制作を行います。

滞在制作中の活動を構想するための手がかりとして、AIR プログラムでは毎年異なるタイトルを掲げています。本年度のプログラム名称「CAMP」は、一時的な居住のための場所や技術の訓練などを行うこと、特定の感性や信念を共有する集団、また歴史的にさまざまなマイノリティグループ間で共有されてきた反体制的な美学的感覚をも表す言葉です。表現者が集い滞在する場であることや、都会的な快適さから隔離され自らの表現と向き合うことにある場所性を表すとともに、「CAMP」は非常事態や例外を生き延びていく術でもあるでしょう。

【お問合せ】 青森公立大学 国際芸術センター青森:大黒

Tel: 017-764-5200 Fax: 017-764-5201 Mail: acac-1@acac-aomori.jp

Web: <https://acac-aomori.jp/>



Aomori Contemporary Art Centre
国際芸術センター青森

本年度は ACAC の施設改修工事に伴い、ACAC の展示棟ではなく青森駅に直結する JR 青森駅東口ビル内の協同組合タッケン美術展示館を成果発表の場とします。青森という土地に集い、例年とは異なる状況を創造の糧にしながら、今だからこそこできることを考え、新たな環境に応答しようとする 5 名の滞在制作の成果をぜひ見届けていただければ幸いです。

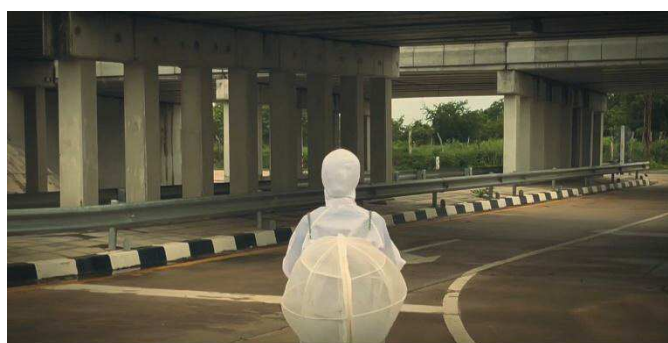
■ 展覧会・イベントのご紹介

○展覧会 アーティスト・イン・レジデンス プログラム 2025「CAMP」

会期 2025 年 11 月 14 日(金)ー11 月 29 日(土) 10:00-18:00 会期中無休、入場無料

会場:協同組合タッケン美術展示館 (〒038-0012 青森市柳川 1-1-5 JR 青森駅東口ビル 4F)

公募により選出された4名のアーティスト(前谷開、丹治りえ、アディ・スンドロ、アティッタヤポーン・センポー)と Pier Arts Centre の推薦による1名(サマンサ・クラーク)を合わせた計 5 名が青森での滞在成果を発表します。



左上より時計回りで、

前谷開《Burns on the Retina (Dear Cells)》2020年、丹治りえ《みおぼえのある風景》2023 年 Photo:大屋玲奈、アティッタヤポーン・センポー《Grassy Diary》Photo from Video、サマンサ・クラーク《The Wave》 Image: detail、アディ・スンドロ《GORENGAN Bureau》 Installation view of Museum MACAN Children's Art Space 2025 年 Photo:Liandro Siringoringo

【お問合せ】 青森公立大学 国際芸術センター青森:大黒

Tel: 017-764-5200 Fax: 017-764-5201 Mail: acac-1@acac-aomori.jp

Web: <https://acac-aomori.jp/>



Aomori Contemporary Art Centre

国際芸術センター青森

○池田佳穂(ゲスト審査員)×参加アーティスト トーク

日時:2025 年 11 月 15 日(土) 13:00-16:00

会場:旧ユーススタイル(〒030-0801 青森市新町 2-6-21)

申込不要、無料

※会場地図



今年度のゲスト審査員の池田佳穂氏と ACAC での滞在制作を行ったアーティスト 5 名が、青森での滞在や制作についてお話しします。

○前谷開ワークショップ「写真になる」

日時:2025 年 11 月 1 日(土)、2 日(日) 10:00-17:00※1 日ごとに完結するワークショップになります。

集合: 国際芸術センター青森、展示棟ラウンジ

定員:各日 5 名※要申込、無料

写真を軸に活動を行ってきた前谷開と写真行為を集団で行うパフォーマンスのようなワークショップを行います。

○アティッタヤポーンとタイナイト★(仮)

日時:2025年11月21日(金)

会場:くいもんや まるふく(青森県青森市幸畑 1-21-20)

アティッタヤポーン・センポーの創作活動の原点である、タイのイサーン地域の文化を楽しむイベントです。

○丹治りえワークショップ「きおくのしろくをさがし、しろくのきおくをたどる」(仮)

日時:2025年11月22日(土)

会場:旧ユーススタイル(青森市新町 2-6-21)

過去の日常の写真を持ち寄り、お話ししながら青森の街を散策し、それぞれの記憶や思い出を共有し合うワークショップです。

○アディ・スンドロワークショップ「版画&揚げ物ーキッチンリトグラフとゴレガンワークショップ」(仮)

日時:2025年11月24日(月)

家庭にある材料を使って行う版画技法「キッチンリトグラフ」で包み紙を作り、インドネシアの揚げ物「ゴレガン」も一緒に手作りするワークショップを行います。

* プログラム期間中にはこの他にもイベント等開催予定です。また、展覧会・イベントは今後の状況により変更となる場合があります。最新情報についてはお手数ですが web サイトや各種 SNS 等をご確認ください。

■ アーティストプロフィール

○前谷開 MAETANI Kai

1988 年愛媛県生まれ、神奈川県在住。2013 年、京都造形芸術大学(現・京都芸術大学)大学院芸術研究科表現専攻 修士課程修了。自身の行為を変換し、確認するための方法として、主に写真を用いた作品制作を行う。訪れる場所や、そこで起こる状況、関係性のなかに自分がどのように立つことができるのかを考え、実践し、その状況を記録して作品化する。制作活動の出発点であるセルフポートレイトを発展させながら、自身の立ち方と、それを風景として見つめるもうひとつの視点を行き来し、“自らの位置”について思索するための装置としてカメラを扱う。共同スタジオ「山中 suplex」、アーティストグループ「木曽路」、「ARCHIVES PAY」に所属し、共同制作や記録撮影などを行う。主な展覧会に、「À l'intérieur de Portrait de famille」(パリ日本文化会館、パリ、2024 年)、「地下の」(TALION GALLERY、東京、2024 年)、「転覆する体 アート、ジェンダーとメディア」(The 5th Floor、東京、2023 年)「類比的鏡/The Analogical Mirrors」(山中 suplex、滋賀、2020 年)、「六本木クロッシング 2019 展:つないでみる」(森美術館、東京、2019 年)などがある。

○丹治りえ TANJI Rie

1983 年福島県生まれ、沖縄県在住。2009 年沖縄県立芸術大学大学院造形芸術研究科環境造形専攻彫刻修士課程修了。建造物の中の日常空間をモチーフに、建築資材や日用品など身近にある素材をアッサンブラージュし、仮設的な構造物を制作して、人間とモノまたは人間と環境の関係性を探っている。同時に社会的な力学によって生まれる構造とともにその影で見過ごされてしまう個人的な出来事に関心を寄せ、モノや場に対する人間の感覚を揺さぶる作品を展開することを試みている。最近の主な展示・活動は、Katsurao AIR(福島、2025 年)、ARCUS Project いばらき アーティスト・イン・レジデンスプログラム(茨城、2024 年)、「パピリオン構想展」(今帰仁村中央公民館、沖縄、2024 年)、個展「みおぼえのある風景」(RENEMIA / Luft shop、沖縄、2023 年)、「和田ながら×新垣七奈 ジャンコクトー『声』」の舞台美術(那覇文化芸術劇場なはーと、沖縄、2023 年)、「REDRAW TRAGEDY」(Künstlerforum Bonn、ドイツ、2022 年)、「SICF22」(スパイラルホール、東京、2021 年)など。

[お問合せ] 青森公立大学 国際芸術センター青森:大黒

Tel: 017-764-5200 Fax: 017-764-5201 Mail: acac-1@acac-aomori.jp

Web: <https://acac-aomori.jp/>



Aomori Contemporary Art Centre

国際芸術センター青森

○アディ・スンドロ Adi SUNDORO

1992 年ジャカルタ生まれ。ジャカルタ州立大学およびバンドン工科大学で美術教育を学び、修士課程を修了。版画制作に取り組み、多様な印刷技法を組み合わせることで、伝統の枠にとらわれない独自の表現を追求している。日々の些細な出来事から社会的・政治的な問題まで、身近な現象にまなざしを向ける表現手段として、版画の特性を活かした創作を行っている。主な受賞歴としては、2016 年フランスの「第 1 回 インターナショナル・キッチン・リソグラフィー・コンテスト」にてパブリック・プライズ賞、2022 年には「UOB ペインティング・オブ・ザ・イヤー 2022」エスタブリッシュド・アーティスト部門で銅賞を受賞など。2019 年にはジョグジャカルタの KKF にて初個展「Bualan Ikan: Narasi-narasi yang Terseret Arus」を開催。2025 年には、ミュージアム・マチャン(MACAN)による子ども向けアートスペースのプロジェクト「GORENGAN Bureau(Good, Organized, Responsive, Engaged Neighborhood Citizen Bureau)」に起用された。2014 年より版画スタジオを拠点とするコレクティブ「グラフィス・フル・ハラ」のメンバーとして活動し、版画の探求・実験・教育に注力している。現在はジャカルタを拠点に、ビジュアルアーティスト、クリエイティブディレクター、講師として活躍している。

○アティッタヤポーン・センポー Atittayaporn SAENPO

1999 年生まれ、タイ・ロイエット県出身。イサーン地域(タイ東北部)を中心とした社会構造を考察する作品を制作する現代アーティスト。風刺的なアプローチを通じて、社会の規範を問い直し、「当たり前」とされ見過ごされがちな問題を浮き彫りする。また、地域のコミュニティと深く関わり合うことを通じ、生活の現実と複雑さを作品に反映させながら、日常への視点を物語を誘発する思索へと変換する。これらの探求は、マルチメディア・インスタレーション、ビデオアート、パフォーマンス、ニューメディアアート、彫刻、写真など、さまざまな形式で表現される。彼女はまた、タイ・コンケン県の KULTX Collaborative Space でアーティストメンバーおよびアシスタントとして活動している。彼女の作品は、「Young Artist 2021」、「Gold Rush Go Northeast」(KULTX Collaborative Space、2022 年)、「SOE We Trade Everything 2023: The Serendipity」、「Kenduri Seni Patani 2024: Grassy Diary」、「Art On Farm 2024: Khakis in the Khampom City and Beyond」など、数多くの展覧会で展示された。

○サマンサ・クラーク Samantha CLARK

オークニーを拠点とするビジュアルアーティスト、ライター。オークニー諸島の風、空、海といったダイナミックな自然環境に呼応した作品を制作する。特に、水を、この世界における深い共生関係とはかなさを示すものとして捉えて思索の対象としている。クラークの実践は、執筆、ドローイング、インスタレーション、映像、そして公共空間における恒久設置作品など多岐にわたり、現在は絵画と反復がもたらす瞑想性について取り組んでいる。

エディンバラ芸術大学(1985～1989 年)、ベオグラード美術アカデミー(1991 年)、スレード美術学校(1993～1996 年)で学び、UCLAN で環境哲学の修士号(2011 年)、セント・アンドリュース大学でクリエイティブ・ライティングの博士号(2017 年)を取得。これまでに数多くのレジデンス、コミッションワーク、展覧会を行っており、2019 年にはカークウォールにあるバルフォア病院のために 30 メートルの壁画を制作した。そのほか、オックスフォード大学、ローマ・ブリティッシュ・スクール(1991 年)、タスマニア大学(2000 年)、バーゼルの IAAB 国際交換スタジオ(2004 年)などでレジデンスを経験した。初の著書『The Clearing』は、2020 年に Little, Brown 社より出版された。2023 年には、初代となる RSA MacRobert Trust Art Award for Painting を受賞した。

■ ゲスト審査員プロフィール

○池田佳穂 IKEDA Kaho

インディペンデント・キュレーター。2016 年より東南アジアを中心に、土着文化や社会情勢から発展したコレクティブと DIY カルチャーを調査。展覧会、パフォーマンス、教育プログラムなどを複合した横断的なキュレーションに関心をもつ。森美術館でアシスタントとして経験を積み、2023 年春に独立。山中 suplex の共同プログラムディレクター、アートセンターBUG および「神戸六甲ミーツ・アート 2024 beyond」のゲストキュレーターを務める。近年の展覧会やラーニング事業の主な企画実績として、「バグスクール 2024: 野性の都市」(BUG、2024 年)、「みんなで土をランする！」(山中 suplex、2024 年)、「一人で行くか早く辿り着くか遠くを目指すかみんな全滅するか」(山中 suplex、2024 年)などがある。



■ 開催概要

展覧会名 | 青森公立大学 国際芸術センター青森[ACAC] アーティスト・イン・レジデンスプログラム 2025「CAMP」

プログラム期間 | 2025 年 9 月 15 日(月) - 12 月 15 日(月) ※作家が滞在できる期間

展覧会会期 | 2025 年 11 月 14 日(金) - 11 月 29 日(土) ※会期中無休、入場無料

会場 | 協同組合タッケン美術展示館 (青森市柳川 1-1-5 JR 青森駅東口ビル4F)

開館時間 | 10:00 - 18:00

その他 | ACAC の事業運営支援を目的とする「事業協力金(寄付金)」への協力をお願いしています。

当館の活動をご理解いただき、ご寄附という形でみなさまの力強いご支援・ご協力をいただければ幸いです。

主催 | 青森公立大学 国際芸術センター青森 [ACAC]

協力 | AIRS(アーティスト・イン・レジデンス・サポーターズ)

助成 | 文化庁 令和 7 年度 文化庁 アーティスト・イン・レジデンス型地域協働支援事業

後援 | 青森市、青森テレビ、RAB 青森放送、青森朝日放送、青森ケーブルテレビ、エフエム青森、ABH ラジオ、
コミュニティラジオ局 BeFM、東奥日報社、陸奥新報社、デーリー東北新聞社

企画 | 原田桃望、瀬藤朋、大黒優香(ACAC 学芸チーム)

広報用画像について

作品および広報用画像(メインビジュアル等)を下記のリンク(Google Drive)からダウンロードしていただくことができます。作品画像を使用される際は、同じフォルダ内にあるクレジットをご確認いただき、必要情報をご明記のほどご協力お願いします。

また本展覧会、プログラムを取り上げていただく場合には、恐れ入りますが情報確認のため校正原稿をお送りいただき、掲載後には、掲載誌(紙媒体)、WEB リンク等をお送りください。

<https://drive.google.com/drive/folders/1S1CPZ5xT6pHGkryLGFoI33TC6CivkBuO?usp=sharing>

青森公立大学 国際芸術センター青森 [ACAC]
アーティスト・イン・レジデンス プログラム2025
「CAMP」

Aomori Contemporary Art Centre, Aomori Public University
Artist in Residence Program 2025



参加アーティスト | Artists

前谷 開 | MAETANI Kai
丹治 りえ | TANJI Ric
アディ・スンドロ | Adi SUNDORO
アティッタヤポーン・センポー | Atittayaporn SAENPO
サマンサ・クラーク | Samantha CLARK

開催会場 | Venue

協同組合タッケン美術展示館
Aomori Citizens' Art Gallery

開催会期 | Exhibition period

2025. 11. 14 (fri)–11. 29 (sat)

プログラム期間 | Program period

2025. 9. 15 (mon)–12. 15 (mon)

*作業が可能な期間 | The residency period available to the artist.

国際芸術センター青森 (ACAC) は、国内外のアーティストが一定期間滞在しながら創作活動を行うアーティスト・イン・レジデンス (AIR) を中心事業とした施設として、2001年に開館しました。
ACACではアーティストのみならず、キュレーターやリサーチャーなど幅広く文化芸術活動に携わる方々を対象に、公募制によるレジデンスプログラムを実施してきました。本年度は国内外から800件を超える応募があり、その中から採択された4名の参加者に加え、スコットランド北海岸に位置するオークニー諸島、メインランド島の中心地のひとつであるストロムネスに拠点を持つアートギャラリー／美術館であるPier Arts Centreの推薦による1名を合わせた計5名を招へいし、滞在制作を通じてワークショップやトークイベント、成果発表など多彩なプログラムを展開します。本年度はACACの施設改修工事に伴い、ACACの展示棟ではなく、青森駅に直結するJR青森駅東口ビル内の協同組合タッケン美術展示館を成果発表の場とします。青森という土地に集い、例年とは異なる状況を創造の糧にしながら、今だからこそできることを考え、新たな環境に応答しようとする5名の滞在制作の成果をぜひ見届けていただければ幸いです。

「CAMP」について

滞在期間中の活動を構想するための手がかりとして、AIRプログラムでは毎年異なるタイトルを掲げています。2025年度のプログラム名称「CAMP」は、一時的な居住のための場所や技術の訓練などを行うこと、特定の感性や信念を共有する集団、また歴史的にさまざまなマイノリティグループ間で共有されてきた反体制的な美学的感覚をも表す言葉です。表現者が集い滞在する場であることや、都会的な快適さから隔離され自らの表現と向き合うことになるACACの場所性を表すとともに、「CAMP」は非常事態や例外を生き延びていく術でもあるでしょう。

Aomori Contemporary Art Centre (ACAC) opened in 2001 as a facility to mainly plan and administer Artist in Residence (AIR) programs in which artists from in and outside Japan could work on their creative activities while staying at ACAC. ACAC has been implementing open call residence programs for a wide range of people involved in culture and arts including not only artists but also curators and researchers. We received more than 800 applications from all over the world this year, and invited four participants selected from them, added by one person recommended by Pier Arts Centre, art gallery and museum based in Stromness, one of the main towns on the mainland of the Orkney Islands on the north coast of Scotland. We will implement various programs including workshops, talk events and exhibitions while supporting residency activities of these five participants. This year, because of the renovation work going on at the ACAC facilities, we will give Result Presentation at the Aomori Citizens' Art Gallery inside the JR Aomori Station East Exit Building adjacent to the Aomori Station, instead of ACAC's Exhibition Hall. Thinking about the five participants getting together specifically in Aomori, who are creatively inspired by a different situation compared to the past years, and minding what they can do now while trying to respond to the new environment, we sincerely hope that you will witness the result of their residency production.

About "CAMP"

We offer a different title for the AIR program each year as a foothold to develop activities during the residency period. This year's title, "CAMP," is an English word which carries several meanings: a temporary place of shelter; a place for conducting training in specific skills; a group sharing a given sensibility or doctrine; and the name of a subversive aesthetic style historically shared by various minority groups. "CAMP" represents the nature of ACAC as a place for artists to gather, stay, and confront their own expression while isolated from the comforts of city life; at the same time, it is also a means for surviving states of emergency and exception.

主催

青森公立大学 国際芸術センター青森 [ACAC]
協力
AIRS (アーティスト・イン・レジデンス・サポーターズ)
助成
令和7年度 文化庁 アーティスト・イン・レジデンス型 地域協働支援事業
協賛
青森市
青森テレビ
RAB青森放送
青森朝日放送
青森ケーブルテレビ
エフエム青森
ABHラジオ
コミュニティラジオ局 BeFM
東和印刷社
陸奥新報社
デーリー東北新聞社

Organized by

Aomori Contemporary Art Centre [ACAC], Aomori Public University
In cooperation with
AIRS (Artist in Residence Supporters)

Supported by

The Agency for Cultural Affairs Government of Japan, Fiscal year 2025

Nominal Support

Aomori City
Aomori Television Broadcasting Co., Ltd.
RAB (Radio Aomori Broadcasting) Co., Ltd.
Asahi Broadcasting Aomori Co., Ltd.
Aomori Cable Television
Aomori FM Broadcasting
ABH (Aomori Bunka Housou)
BeFM
The To-o Nippo Press Co., Ltd.
The MURUSU SHIMPO Co., Ltd.
The Daily Tohoku Shinbun Inc.



開催会場

協同組合タッケン美術展示館
〒038-0012
青森市柳川1-1-5 JR青森駅東口ビル4F

Exhibition Venue

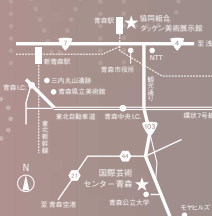
Aomori Citizens' Art Gallery
4th floor of the JR Aomori Station East Exit Building,
1-1-5 Yamagawa Aomori, 038-0012

お問い合わせ

青森公立大学 国際芸術センター青森 [ACAC]
〒038-0134
青森県青森市合子沢字山崎152-6
TEL 017-764-5200
FAX 017-764-5201

Contact

Aomori Contemporary Art Centre [ACAC],
Aomori Public University
152-6, Yamazaki, Goshizawa, Aomori, 038-0134
TEL 017-764-5200
FAX 017-764-5201



展覧タイトル | From top to bottom

～ 前谷 開 MAETANI Kai (Burns on the Retina (Dear Cells)) 2020
～ 丹治 りえ TANJI Ric (ひまわりのある風景) 2023 | Photo: 大岡均金
～ アティッタヤポーン・センポー Atittayaporn SAENPO (Gassy Diary) Photo from Video
～ アディ・スンドロ Adi SUNDORO (IGORENGAN Bureau) Installation view of Museum MACAN Children's Art Space | 2023
Photo: Linda Smittingers
～ サマンサ・クラーク Samantha CLARK (The Wave) 1st detail





↑ (Kapsel7/2022) 2014
↑ (Scope) Installation view | 2022

前谷 剛

滞在期間

9月16日 [火] - 12月15日 [月]

1986年愛媛県生まれ、神奈川県在住。2013年、京都造形芸術大学（現・京都芸術大学）大学院芸術研究科表現専攻 修士課程修了。自身の行為を変換し、確認するための方法として、主に写真を用いた作品制作を行う。訪れる場所や、そこで起こる状況、関係性のなかに関わり合いに立つことができるのかを考え、実践し、その状況を記録して作品化する。制作活動の出発点であるセルフポートレイトを発展させながら、自身の立ち方と、それを風景として見つめるもうひとつの視点を行き来し、「自らの位置」について思索するための装置としてカメラを扱う。共同スタジオ「山中suplex」、アーティストグループ「木曾路」、[ARCHIVES PAY]に所属し、共同制作や記録撮影などを行う。主な展覧会に、[À l'intérieur de Portrait de famille]（パリ日本文化会館、パリ、2024年）、[地下の心]（TALION GALLERY、東京、2024年）、[転覆する体 アート、ジェンダーとメディア]（The 5th Floor、東京、2023年）、[顔比の鏡／The Analogical Mirrors]（山手suplex、滋賀、2020年）、[六本木クロッシング2019 展「つないでみる」]（森美術館、東京、2019年）などがある。

前谷は近年、活動初期から用いていたセルフポートレイトを発展させ、自身を被写体としながら、あるいは自身を撮るようとして、他者や環境と関わる術を探索しています。これまで各地での滞在制作に伴って訪れた「半島」は、前谷曰く風景その場所と立っ自分の位置を意識させられる場所です。青春の滞在では、津軽半島の海岸線に沿って変化する風景を辿るフィールドワークと、撮影現場を主眼として構成し、複数の人々を巻き込むパフォーマンスを行います。

MAETANI Kai

Residency period

Sep. 16 (tue) - Dec. 15 (mon)

Born in Ehime Prefecture in 1988, Maetani Kai now resides in Kanagawa Prefecture. In 2013, he received an MA in Fine Art from the Kyoto University of the Arts. He works primarily with photography, which he uses as a means to transform and affirm his own behaviors. He thinks about how he can relate to the places he visits and the situations that arise there, then puts those ideas into practice and creates artworks that document the outcomes. Starting from self-portraits, he then develops his creations using the camera to contemplate his "own position," moving back and forth between his own standpoint and another which views him as part of the landscape. Maetani also engages in artistic collaborations and archival photography as a member of the shared studio "Yamanaka Suplex," as well as the artist groups "Kisoi" and "ARCHIVES PAY." Major exhibitions include "À l'intérieur de Portrait de famille" (Maison de la culture du Japon à Paris,2024), "In The Basement" (TALION GALLERY, Tokyo, 2024), "The Subverting Body: Art, Gender, and Media" (The 5th Floor, Tokyo, 2023), "The Analogical Mirrors" (Yamanaka Suplex, Shiga, 2020), and "Roppongi Crossing 2019: Connecting" (Mori Art Museum, Tokyo, 2019).

In recent years, Maetani developed his self-portraits which he has been working on since the early stages of his activities, and through photographing him as a subject, he explores ways to get involved with others and the environment. The peninsulas where he visited in other residency programs were places where he could become aware of the scenery and the position of himself standing in that place, says Maetani. In the residency program in Aomori, he will conduct fieldwork to follow the changing scenery along the coastline of the Tsugaru Peninsula. He will also give a performance consisting of the shooting sites while involving other people.

ゲスト審査委員
池田佳穂
インディペンデント・キュレーター。2016年から東南アジアを中心に、土着文化や社会情勢から発展したコレクティブやDIYカルチャーを調査、展覧会、パフォーマンス、教育プログラムなどを複合した横断的なキュレーションに関心をもち、森美術館でアシスタントとして経験を積み、2023年春に独立。山中suplexの共同プログラムディレクター、アートセンターBUGおよび「神六甲ミーツ・アート2024 beyond」のゲストキュレーターを務める。近年の展覧会やランニング事業の主な企画実案として、「バグスクール2024：野性の都市」(BUG, 2024年)、「みんなで土をランする」(山手suplex, 2024年)、「一人で行くか早く帰るのか遠くを目指すかみんな全滅するか」(山手suplex, 2024年)などがある。



↑ 「土をおこすこと」 2025
↑ 「過ぎはとほく そまそまに」 2024 | Photo: Kato Hajime

丹治りえ

滞在期間

9月16日 [火] - 12月8日 [月]

1983年福島県生まれ、沖縄県在住。2009年沖縄県立芸術大学大学院造形芸術研究科環境造形専攻彫刻修士課程修了。建造物の中の日常空間をモチーフに、建築資材や日用品など身近にある素材をアッサンブラージュし、仮設的な構造物を制作して、人間とモノまたは人間と環境の関係性を探っている。同時に社会的な力方によって生まれる構造とともにその影で見えごされてしまう個人的な出来事に関心を寄せ、モノや場に対する人間の感覚を描きながら作品を展開することを試みている。最近の主な展示・活動は、Katsurao AIR (福島、2025年)、ARCUS Project いばらき アーティスト・イン・レジデンスプログラム (実成、2024年)、「パビリアン構想展」(今堀に村公民館、沖縄、2024年)、個展「みおへえのあの風景」(RENEMIA / Luft shop、沖縄、2023年)、「相田ながら×新垣七奈 ジャン・コクトー「J」の舞台美術」(都立文化芸術劇場なはーと、沖縄、2023年)、「REDRAW TRAGEDY」(Künstlerforum Bonn、ドイツ、2022年)、「SICF22」(スパイラルホール、東京、2021年)など。

漆を先で染めた衣服や日用品を用いて、別の地域で暮らす人々のクローゼットやキッチンなど、私的な空間を仮想的に再現するプロジェクトを継続してきた丹治。このプロジェクトは地域を変えて繰り返し実践することで、日常の断片や場所を越えてどのように繋がるのかを探索試みでもあります。青春では、三沢市を中心にリサーチを行い、この土地で収集したモノを使い、まったく異なる地域で暮らす人々の日常風景を再構築します。災害や戦争による日常が変換しえて変わりを現代において、「日常」は漆を越えて交換可能なものかーその問いを実践を通して探ります。

TANJI Rie

Residency period

Sep. 16 (tue) - Dec. 8 (mon)

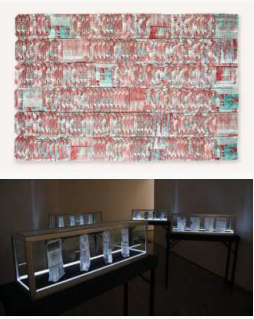
Born in Fukushima Prefecture in 1983, Tanji Rie now resides in Okinawa Prefecture. In 2009, she received an MA in Sculpture from the Environmental Design Major of the Graduate School of Formative Arts at Okinawa Prefectural University of Arts. Using the everyday spaces within buildings as a motif, she uses found objects such as construction materials and household items to create assemblage pieces which serve as temporary structures examining the relationships between people and things, or between people and the environment. At the same time, she is concerned with the structures born out of social dynamics and the personal events that such structures obscure, creating works which attempt to shake up people's perceptions of objects and sense of place. Recent major exhibitions and activities include Katsurao AIR (Fukushima, 2025), the ARCUS Project Artist-in-Residence Program (Ibaraki, 2024), "Pavilion Kusou" (Nakainson Central Public Hall, Okinawa, 2024), "Familiar Scenery" (RENEMIA / Luft shop, Okinawa, 2023), stage design for "La Voix Humaine by Jean COCTEAU, directed by WADA Nagara and performed with ARAKAKI Nana" (NAHA CULTURAL ARTS THEATER NAHART, 2023), "REDRAW TRAGEDY" (Künstlerforum Bonn, Germany, 2022), and "SICF22" (Spiral Hall, Tokyo, 2021).

Tanji has been working on projects in which private spaces such as a closet and a kitchen of those living in other areas are temporarily reproduced, using clothes or daily goods collected at her residency site. Through repeatedly implementing this project while changing places, she explores how fragments from ordinary life can get connected beyond places. In Aomori, she conducts research mainly in Misawa City, and using things that she collects in this area, she will reconstruct daily life scenery of people living in a totally different district. In the contemporary society where a natural disaster or war could completely transform one's ordinary life, the question of whether "daily life" can be exchangeable beyond place is explored through this project.

Guest Judge

IKEDA Kaho

Independent curator. Since 2016, she has been researching collective and DIY cultures that have developed out of indigenous cultures and social conditions, with a focus on Southeast Asia. She has an interest in interdisciplinary curation that combines forms such as exhibitions, performing arts, and educational programs. After gaining experience as a curatorial assistant at Mori Art Museum, she began working independently in 2023. She is also a program co-director of the shared studio Yamanaka Suplex, and a guest curator at the Art Center BUG and the "Rokko Meets Art 2024 beyond" art festival. Recent major exhibitions and learning projects planned by Ikeda include: "BUG School 2024: Feeling Cities with Wild Sense" (BUG, 2024); "Learning Soil Together" (Yamanaka Suplex, 2024); and "Go Alone? Arrive Faster? Aim Further? Die Together?" (Yamanaka Suplex, 2024).



↑ (Belantara Data #2 (Udara Wilderness #2)) | 2025
↑ (Sei Bungkur Gergeng #1 (Gergeng Wrappers Series)) | 2022

アディ・スンドロ

滞在期間

10月7日 [火] - 12月7日 [日]

1992年ジャカルタ生まれ。ジャカルタ州立大学およびバンドン工科大学で美術教育を学び、修士課程を修了後、版画制作に取り組み、多様な印刷技法を組み合わせることで、伝統の枠にとられない独自の表現を追求している。日々些細な出来事から社会的・政治的な問題まで、身近な現象にまなざしを向ける表現手段として、版画の特性を活かした創作を行っている。主な受賞歴としては、2016年フランスの「第1回インターナショナル・キッチン・リゾグラフィー・コンテスト」にてパブリック・プライズ賞、2022年には「UOB ベンチング・オブ・ザ・ペーパー2022」エスタブリッシュド・アーティスト部門で銅賞を受賞など。2019年には「ジャダグジャタのKKF」にて初個展「Bulan Ikan: Negeri-narasi yang Terseret Arus」を開催。2025年には、ミュージウム・マチラン (MACAN) による子ども向けアートスペースのプロジェクト「GORENGAN Bureau (Good, Organized, Responsive, Engaged Neighborhood Citizen Bureau)」に起用された。2014年より版画スタジオを拠点とするコレクティブ「グラフィス・フル・ハラ」のメンバーとして活動し、版画の探求・実験・教育に注力している。現在はジャカルタを拠点に、ビジュアルアーティスト、クリエイティブディレクター、講師として活躍している。

インドネシア・ジャカルタ出身のスンドロは、現地で購入した「コレガン」と呼ばれる軽食が個人情報を記載された印刷物に包まれている経験きっかけに、プライバシーと公共空間の境界について考察するプロジェクトを展開してきました。今回の滞在では、日本とインドネシアにおけるプライバシー意識や喫煙物の扱いの違いにも注目し、地域の方々と関わりながら版画制作を通じて、社会や文化に潜む課題を見つめ直します。

Adi SUNDORO

Residency period

Oct. 7 (tue) - Dec. 7 (sun)

Born in Jakarta in 1992. Adi Sundoro (Asun) completed his Fine Arts Education studies at Jakarta State University (UNJ) and Bandung Institute of Technology (ITB) at the master's degree. His passion for printmaking has resulted in a combination of various printing techniques that are often presented in unconventional format or even expanded. In his works, Asun often utilizes the principles of printmaking as an expression in seeing the daily phenomena around him, ranging from daily trivial issues to social politics. Some of his works have received awards such as the Public Prize Award at "The 1st International Kitchen Litho Contest 2016" in France and Bronze Winner at the UOB Painting of the Year 2022 in the Established Artist category. His first solo exhibition titled "Bulan Ikan: Negeri-narasi yang Terseret Arus" was held at KKF Yogyakarta in 2019. In 2025, Asun was commissioned by Museum of Modern and Contemporary Art in Nusantara (MACAN) for the Children's Art Space; GORENGAN Bureau (Good, Organized, Responsive, Engaged Neighborhood Citizen Bureau). Since 2014, Asun has been actively involved in Crafts Huru Hara, a printmaking studio-based collective that focuses on the exploration, experimentation and education of printmaking. Asun lives and works in Jakarta, as a visual artist, creative director and lecturer.

In Indonesia, "gorengan" is a snack sold by street vendors and it is wrapped in printed matter that carried personal information. Coming from Jakarta, Indonesia, Sundoro got interested in a borderline between privacy and public realm and developed his project on that topic. During the residency program this time, he will focus on awareness of privacy and how trash is treated in Japan and Indonesia and will look for issues latent in the society and culture through his printmaking while getting involved with local people.

In Indonesia, "gorengan" is a snack sold by street vendors and it is wrapped in printed matter that carried personal information. Coming from Jakarta, Indonesia, Sundoro got interested in a borderline between privacy and public realm and developed his project on that topic. During the residency program this time, he will focus on awareness of privacy and how trash is treated in Japan and Indonesia and will look for issues latent in the society and culture through his printmaking while getting involved with local people.

ゲスト審査員とACAC館長・学芸員による選評はこちらからご覧いただけます。
The comments and reflections on the selection process by this year's guest judge Ikeda Kaho, ACAC director and curatorial staff can be viewed here.



↑ (Remind me of you) | 2024
↑ (Grassy diary) | 2023

アティッタヤポーン・センポーン

滞在期間

10月2日 [木] - 12月1日 [月]

1999年生まれ、タイ・ロイ県出身。イサーン地域（タイ東北部）を中心とした社会構造を考察する作品を制作する現代アーティスト。風刺的なアプローチを通じて、社会の規範を問い直し、「当たり前」とされ見過ごされがちな問題を浮き彫りする。また、地域のコミュニティと深く関わり合うことを通じ、生活の現実と複雑さを作品に反映させながら、日常への視点や物語を誘発する思索へと変換する。これらの探求は、マルチメディア・インスタレーション、ビデオアート、パフォーマンス、ニューメディアアート、彫刻、写真など、さまざまな形式で表現される。彼女はまた、タイ・コンケン県のKULTX Collaborative Spaceでアーティストメンバーおよびアシスタントとして活動している。彼女の作品は、「Young Artist 2021」、「Gold Rush Go Northeast」(KULTX Collaborative Space, 2022年)、「SOE We Trade Everything 2023: The Serendipity」、「Kenduri Seni Patani 2024: Grassy Diary」、「Art On Farm 2024: Khakis in the Khampom City and Beyond」など、数多くの展覧会で展示された。

センポーンが育ったタイのイサーン地方では、かつて昆虫が人々の暮らしと文化の一部でした。しかし急速な経済成長により生態系は変化し、在来種のバタは姿を消しました。この状況を受け、彼女は「今の時代、バタはどこで育つ自費をするのか」という問いから発案したアートプロジェクトを展開してきました。滞在制作では、虫を農地から自然へと送り出す津軽の伝統儀式「虫送り」と、昆虫食文化を異国の地へと継承する日本のタイ移住労働者の記憶を手がかりに、イサーンと日本の東北地方を繋ぐ実践を探索します。そして、この2つの地域のあいだに新たな対話を構築することを目指します。

Atittayaporn SAENPO

Residency period

Oct. 2 (thu) - Dec. 1 (mon)

Born in 1999 in Roi Et, Thailand. Atittayaporn Saenpo is a contemporary artist whose practice explores the structural systems of society, particularly in Isan (Northeast regions of Thailand). With a focus on satirical art, her work interrogates social norms and highlights issues often overlooked or deemed "normal." By immersing themselves in local communities, she creates art that reflects the realities and complexities of daily life in these areas, transforming everyday observations into thought provoking narratives. These explorations manifest across various forms such as multimedia installations, Video art, Performance, New media art, Sculpture, and Photos. She is currently an artist member and assistant at KULTX Collaborative Space in Khon Kaen Province, Thailand. Her body of work has been displayed in numerous exhibitions, including Young Artist 2021, Gold Rush Go Northeast at KULTX Collaborative Space (2022), SOE We Trade Everything 2023: The Serendipity, Kenduri Seni Patani 2024: Grassy Diary, and Art On Farm 2024: Khakis in the Khampom City and Beyond.

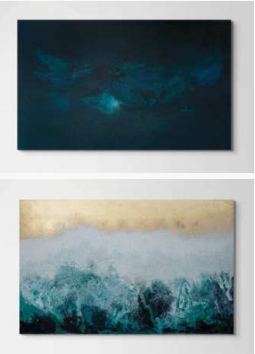
In Isan district in Thailand where Saenpo grew up, insects used to be part of people's lives and culture. Due to a rapid economic growth, however, the ecosystem changed, and native species of grasshopper disappeared. In such a situation, she has been working on an art project stemming from the question, "In today's world, where do grasshoppers go to hang themselves?" In this residency program, she focuses on Tugaur's traditional ritual of "mushi-okuri" in which insects are expelled from farmland in a natural way, and memories of immigrant workers from Thailand in Japan who carry on insect-eating culture. Based on these interests, she explores practices that connect Tohoku District in Japan and the Isan District.

In Isan district in Thailand where Saenpo grew up, insects used to be part of people's lives and culture. Due to a rapid economic growth, however, the ecosystem changed, and native species of grasshopper disappeared. In such a situation, she has been working on an art project stemming from the question, "In today's world, where do grasshoppers go to hang themselves?" In this residency program, she focuses on Tugaur's traditional ritual of "mushi-okuri" in which insects are expelled from farmland in a natural way, and memories of immigrant workers from Thailand in Japan who carry on insect-eating culture. Based on these interests, she explores practices that connect Tohoku District in Japan and the Isan District.

プログラム期間中、イベント情報は随時追加されます。各イベントの詳細につきましてはHPまたはSNSで確認またはお問い合わせください。
プログラム期間中、イベント情報は随時追加されます。各イベントの詳細につきましてはHPまたはSNSで確認またはお問い合わせください。



会場地図 | Venue map (Google Maps)



↑ (Cloud, Moon, Wave) | 2024
↑ (The Wave) | 2025

サマンサ・クラーク

滞在期間

11月1日 [土] - 11月30日 [日]

オークニーを拠点とするビジュアルアーティスト、ライター。オークニー諸島の風、空、海といったダイナミックな自然環境に呼応した作品を制作する。特に、水と、この世界における深い共生関係とはかなさを示すものとして捉え、思索の対象としている。クラークの実践は、執筆、ドローイング、インスタレーション、映像、そして公共空間における恒久設置作品など多岐にわたり、現在は絵画と反復がもたらす瞑想性について取り組んでいる。

エディンバラ芸術大学 (1985-1989年)、ベオグラード美術アカデミー (1991年)、スレード美術学校 (1993-1996年) で学び、UCLANで環境哲学の修士号 (2011年)、セント・アンドリュース大学でクリエイティブ・ライティングの博士号 (2017年) を取得。これまでに数多くのレジデンス、コミッションワーク、展覧会を行っており、2019年にはカークウォールにあるバルフォア病院のために30メートルの壁画を制作した。そのほか、オックスフォード大学、ローマ・ブリタニッシュ・スクールの (1991年)、タスマニア大学 (2000年)、パーゼル のIAAB国際交換スタジオ (2004年) などでレジデンスを経験。初の著書「The Clearing」は、2020年にLittle, Brown社より出版された。2023年には、初代となるRSA MacRobert Trust Art Award for Paintingを受賞した。

青春を振り返る水について深く理解するため、日本文化において水がどのような意味を持つかを調査します。また、シングルライフの反復的な模様による、瞑想的かつ協働的なローイングにも取り組めます。クラークによれば、これは小さな行為が繰り返され、共有されることで大きな意味や力を持つこと——まるで水滴が山を回り、小さな小川が峡谷を刻むように——を身体的に理解するための方法です。こうしたドローイング制作を多くのひとと共に実践し、忍耐強い協働の成果を体験できる、開かれた場を設ける予定です。

Samantha CLARK

Residency period

Nov. 1 (sat) - Nov. 30 (sun)

Samantha Clark (Sam) is a visual artist, writer based in Orkney whose work responds to the islands' dynamic natural environment of wind, sky and sea. In particular, the element of water has become a focus of contemplation that reveals the deep interdependence and incommensurability of the living world. Sam's practice encompasses writing, drawing, installation, video and permanent works in the public realm, with painting, and the meditative quality of repetition as her primary current focus. Sam trained at Edinburgh College of Art (1985-89), Belgrade Academy of Fine Arts (1991) and the Slade School of Art (1993-6). She has an MA in Environmental Philosophy (UCLAN, 2011) and a PhD in Creative Writing (St Andrew's University, 2017). She has carried out numerous residencies, commissions and exhibitions, including a commission to create a 30m mural for the Balfour Hospital in Kirkwall in 2019, residencies at Oxford University, the British School at Rome (1991), the University of Tasmania (2000) and IAAB International Exchange Studios in Basel (2004). Her first book "The Clearing" was published by Little, Brown in 2020. In 2023 she received the inaugural RSA MacRobert Trust Art Award for Painting.

She plans to research the significance of water in contemporary and historical Japanese culture, to become acquainted with the waters that move around and through the local environment of Aomori, and record this through drawing, writing and moving image. She will also explore meditative and collaborative drawing that makes use of simple, repetitive mark-making. According to Clark, this is an embodied way to understand how small individual actions can, when repeated and shared, become significant and powerful, like drops of water eroding a mountain or a small stream cutting a deep gorge. She will create an inclusive opportunity for people to engage in such drawing practice together and experience the achievement of a patient collaboration.

She plans to research the significance of water in contemporary and historical Japanese culture, to become acquainted with the waters that move around and through the local environment of Aomori, and record this through drawing, writing and moving image. She will also explore meditative and collaborative drawing that makes use of simple, repetitive mark-making. According to Clark, this is an embodied way to understand how small individual actions can, when repeated and shared, become significant and powerful, like drops of water eroding a mountain or a small stream cutting a deep gorge. She will create an inclusive opportunity for people to engage in such drawing practice together and experience the achievement of a patient collaboration.

Events information will be updated any time during the program. Please check them out on our website and SNS or contact us for the details of each event.